にして、殘なく喰盡し、塵ばかりの物も殘る處なし、莊官大いによろこび、頓て二十金を把いだして、八兵衞に與へけれ共、小僕死ざる間は、要用にあらずとて、是を受ず、趙て山田屋へ歸りけり、○下略

〔百家琦行傳三〕蛇隱居

天明寛政の頃、東武青山或御組屋敷のほとりに、武家の隱居ありけり、氏を武谷、俗稱を又三郎と云けり、此人希有の癖あり、常に虫を食することを好み、○略中虫多き中にも、第一の好味として愉び飡するものは蛇なり、皮をはぎ、骨を去り、二三寸程づゝに斬て、竹串にさし、炙物にして食す、予○八島五岳其頃此老人に蛇のかばやきを貰ひて、飡たり、はなはだ美味ものなりし、外人は釣竿をかたげて川狩にゆくなかに、此老人のみは、野山を經めぐりて、蛇を數隻とり來り、是を按排して、酒のみて樂みける、○略下

蛇事蹟

〔古事記上〕速須佐之男命、○略中降出雲國之肥上河上在鳥髮地、○略中老夫與老女二人在、而童女置中而泣、爾問賜之汝等者誰、故其老夫答言、僕者國神、大山上津見神之子焉、僕名謂足上名椎、妻名謂手上名椎、女名謂櫛名田比賣、亦問汝哭由者何、答白言、我之女者、自本在八稚女、是高志之八俣遠呂智、此三字以音毎年來喫、今其可來時故泣、爾問其形如何、答白、彼目如赤加賀智而、身一有八頭八尾、亦其身生蘿及檜榲、其長度谿八谷峽八尾而、見其腹者、悉常血爛也、此謂赤加賀知者、今酸醬者也、爾速須佐之男命、○略中告其足名椎、手名椎神、汝等釀八鹽折之酒、且作廻垣、於其垣作八門、毎門結八佐受岐、此三字以音毎其佐受岐置酒船而、毎船盛其八鹽折酒而待、故隨告而如此設備待之時、其八俣遠呂智、信如言來、乃毎船垂入己頭、飲其酒、於是飲醉、留○留原本作死、據眞福寺本改、由、伏寢、爾速須佐之男命、拔其所御佩之十拳劍、切散其蛇者、肥河變血而流、故切其中尾時、御刀之刃毀、爾思怪以御刀之前刺割而見者、在都牟刈之大刀、故取此大刀、思異物而、白上於天照大御神也、是者草那藝之大刀也、那藝二字以音